【彙報】
②その他

学徒出陣による東亜同文書院生の派遣先とその傾向

愛知大学東亜同文書院大学記念センター事務室　森 健一

1. はじめに

本稿は、昭和 18 年 10 月に徴兵猶予が停止され、学徒出陣によって出征した東亜同文書院生の派遣先を文献による調査を通して明らかにし、その傾向を検討するものである。

今年は第 2 次世界大戦から 70 年という節目の年を迎え、各方面でさまざまな行事が開催された。筆者が参加した全国大学史資料協議会 2015 年度全国研究会(1)のテーマでも「『戦後 70 年』と大学史資料」とする戦時期の大学史資料の取り扱いについての発表が行われ、時機を得たこともあり示唆に富む内容であった。一般に、戦時期の資料を収集し、伝えていくことは、「戦争を二度と繰り返してはいけない」というメッセージとなるが、大学史としてはこのほかにも「戦争」という特殊な状況において、当人がどのような判断をし、行動したのかについて、自校に関する資料を活用することによって「自己点検・評価活動」につなげていかなければならないと考えている。そこで、筆者は戦後 70 周年の節目に愛知大学の前身校とも言うべき東亜同文書院（のちに大学）(2)の学徒出陣に関する動向について関心を持ち、文献から調査を試みた。

2. 東亜同文書院生の学徒出陣について

昭和 18 年 10 月、「教育に関する戦時非常措置」、いわゆる「学徒出陣」が閣議決定され、高等教育機関に在籍する学生の徴兵猶予が停止された。これにより、東亜同文書院生の第 41 期、42 期、43 期生のうちの 403 名が徴兵の対象となり(3)、10 月 27 日には上海の虹口の武徳殿で徴兵検査を受けた(4)。徴兵受検者は 403 名、うち合格者は 327 名となった(5)。

そして、11 月 27 日、出陣前の書院生 300 数名による行進が海格路の校舎から虹口の新公園（現在の虹口公園）にいたる目抜き通りで行われた。その後、12 月 1 日、南京で二等兵の軍服を着せられ、それぞれの部隊に所属し従軍することとなった。

出征後の書院生の体験については、さまざまな記録により知ることができるほか(6)、藤田による調査(7)では、兵役による中国経験の中での書院生の中国に対する態度の変化をみることができる。次の表は、『東亜同文書院大学史』（滬友会、昭和 57 年）から筆者が学徒出陣によって出征された書院生の配属先をまとめたものである。ここから、東亜同文書院大学における学徒出陣の実態の一部を知ることができる。

---

(1) 平成 27 年 10 月 8 日仙台にて開催。
(2) 中国・上海にあった高等教育機関。明治 34 年に創設され、昭和 20 年に敗戦とともに閉校した。
(3) 大学史編纂委員会編『東亜同文書院大学史―創立 80 周年記念誌―』、滬友会、昭和 57 年、615 頁。
(4) 滬友会『東亜同文書院大学史』昭和 30 年 7 月、滬友会、289 頁。
(5) 前掲『東亜同文書院大学史―創立 80 周年記念誌―』、162 頁。
(6) 『東亜同文書院大学と愛知大学』第 1-4 集、『愛知大学創設期からの想い出写真文集』など。
(7) 藤田佳久「東亜同文書院卒業生の軌跡―東亜同文書院卒業生へのアンケート調査から―」『同文書院記念報』vol.9、平成 13 年、1-71 頁。

[凡例]
(1)出典は『東亜同文書院大学史』(滬友会、昭和57年)による。
(2)調査時期は、昭和18年12月もしくは終戦時とした。
(3)調査対象は、昭和18年10月に徴兵の対象となった第41期、42期、43期生とした。なお、年齢などの理由から翌年徴兵された学生は除いた。
(4)配属先については前掲『東亜同文書院大学史』に記載されている各期の回顧録から具体的な派遣先が明記された137名を取り上げた。このため派遣されても明記がない学生はここでは取り上げていない。

第41期生(昭和15年4月予科入学。昭和17年4月学部入学)

氏名	出身	昭和18年12月もしくは終戦時の派遣先	復員後の進路
H・T	富山	南京陸軍経理学校第1期生。	新日本建設研究会を結成、帰国後平松薬品商会創立。
K・S	茨城	南京予備士官学校を卒え上海で終戦。	茨城建設共進会を創設。
K・K	滋賀	南京予備士官学校を首席で卒業。	新中国との貿易に従事、文化大革命時代5年有余投獄され、昭和48年無罪釈放。
T・H	佐賀	南京予備士官学校卒、独立混成第62旅団に配属され、福州・上海を転戦。	日立造船入社。
T・S	兵庫	南京予備士官学校卒、第23軍金沢師団編入、バイアス湾にて終戦、中国軍との停戦議定書作成や戦犯裁判通訳にあたる。	出生地で繊維加工業を営む。
S・K	鹿児島	南京予備士官学校卒、21年華南より復員。	鹿児島市役所経済局に勤務。
T・M	佐賀	南京予備士官学校を優秀な成績で卒業、原隊に復帰。	戦後は父とともに同興紡の再建に奮闘する。
H・E	熊本	昭和18年南京で入隊。中支各地を移動し南京で除隊。	上海残留1年、昭和22年肥後銀行入行。
O・K	和歌山	南京入隊、昭和20年3月廬州にて戦病死。	—
N・I	高知	南京経理学校を経て陸軍経理部見習士官、終戦時に戦病死。	—
I・S	京都	昭和18年鵄部隊入隊、南京・上海を転戦。上海で除隊。	引き揚げ後、京都大学法学部に入学。
T・M	愛知	上海にて現地除隊。	帰国後森永製菓入社。
U・Y	鹿児島	昭和20年上海で復員。昭和21年引き揚げ。	鹿児島市役所に就職。
S・Y	香川	上海の兵器廠付経理部見習士官のとき終戦。	昭和23年から16年間通産省に勤務。
A・S	東京	昭和18年廬州に入営	進駐軍、繊維貿易公団を経て伊藤忠に入社。
A・Z	東京	昭和19年満州で入隊。昭南経理学校、スマトラを経て昭和22年シンガポールより復員	GHQで英語を覚え、丸紅に入社。
H・H	山口	ビルマより復員	同窓と江南書院を創立、戦後初の「中国語辞典」をはじめ教科書など出版。その後博報堂入社。
H・Y	岐阜	太原から復員。	名古屋でサンケイ新聞入社。
H・S	和歌山	昭和20年1月傷痍軍人として帰郷。	和歌山県庁に奉職。
H・S	福島	南方軍総司令部から復員。	日本社会事業大学に入学するも中退。神奈川新聞社入社。
H・M	熊本	「赤トンボ特攻隊」訓練中に終戦。	農業、日雇い、公務員、商売人などを転々、商業高校教諭。
H・M	沖縄	都城歩兵連隊に入営、久留米幹候生を卒。福岡で終戦。	昭和22年沖縄民政府工業部就職。
I・M	大分	寧波で終戦	神奈川新聞入社。
I・N	熊本	武昌の野砲第二連隊入隊。	国税局勤務。
I・H	岡山	戦後上海で除隊。	昭和23年1月引き揚げ。昭和36年東京で中国総合研究所設立。
K・M	長崎	見習士官として中支各地を転戦、現地除隊。	引き揚げ後、協和醗酵入社。
K・Y	兵庫	予備士官学校より、陸軍中野学校を卒業。	商品取引業界へ。
K・Y	福井	終戦時中支那野戦兵器廠勤務。	戦後笠川薬舗店主。
K・S	大阪	鵄3064部隊入隊、上海で終戦。	大阪の刷子雑貨問屋、小杉商店に入り社長となる。
K・M	茨城	保定幹候隊卒、山西からタイまで転戦。	鉄原、リーダースダイジェスト、米軍、外国商社を転々とする。昭和37年、東京鋼材商事入社。
K・S	青森	満洲で終戦。	帰国後東京タイムズに入る。
K・Y	宮城	鵄3062部隊に入隊。各務ケ原航空隊で終戦。	検察事務官、副検事。
K・M	長野	南方より復員。	職場を転々、昭和30年より同和繊維に入社。
M・T	宮崎	上海で終戦、国府軍政部に留用。	夕刊フクニチ新聞に入社。
M・Y	熊本	広東省で終戦。	各地転職、昭和30年熊本女子商業高校、熊本マリスト学園で英語教師となる。
M・K	栃木	特別操縦見習士官第3期生より対空無線に転科、浜松で終戦。	日本勧業銀行入行。
M・Y	佐賀	見習士官で浙江地帯を転戦。	協和醗酵入社。
N・K	東京	終戦は杭州。	帰国後商社、出版社に勤務。
M・S	佐賀	新京より引き揚げ。	福岡地方経済安定局に入る。
O・K	島根	武昌の独立野砲第2連隊から特別操縦見習士官となり南方を転戦。	神戸で貿易商を営む。
S・T	愛知	武昌の野砲兵第2連隊に入隊。昭和21年3月復員。	羊毛繊維業を営む。
O・S	和歌山	関東軍特務機関に勤務し、終戦後ソ連抑留5年。	昭和25年復員、丸善石油九州支店長、直売部長を歴任。
S・S	宮崎	シンガポールにて終戦、昭和21年7月復員。	宮崎銀行入行。
Y・T	鳥取	シンガポールで情報将校として活躍し、戦後病死。	—
T・S	静岡	山西省の山砲第37連隊入隊、少尉に任官。昭和22年末マレーより復員。	昭和25年東洋棉花に入社。
U・E	埼玉	戦後現地除隊して第3方面軍の兵器接収事務を手伝い、昭和21年4月帰還。	米軍通訳を経て、昭和22年小杉産業入社。
Y・Y	岐阜	上海で終戦。	日比野工業入社。
Y・H	鳥取	東満より日本に移動し、淡路で終戦。	高校教諭を歴任。
Y・Y	岐阜	フィリピンで終戦	昭和23年岐阜の堀越紡績入社。
K・M	岡山	昭和20年6月、温州作戦中、弘法大師で有名な天台山で戦死。	—

K・N	沖縄	華中地区にあって終戦を知り、敵陣に突入して憤死した。	—
B・K	門司	華中戦線にて戦死。	—
M・S	愛知	見習士官時代に天津の野戦病院で病没。	—
O・H	岡山	陸軍航空予備士官として台湾高雄に駐屯。	岡山県庁にて勤務。
U・T	山口	南方戦線に転進中、輸送船と運命をともにした。	—
Y・H	兵庫	上海電信第12連隊に入り戦病死。	—
N・T	石川	陸軍予備士官学校を中退し派遣元の満鉄に復帰。	戦後病死。
I・S	京都	郷土部隊に入営後、南方で戦死。	—
K・T	福岡	海軍予備学生となり、特攻隊員として昭和20年4月22日戦死。	—
K・M	青森	華中で船舶による物資輸送中戦死。	—
K・T	福岡	初等兵教育中、廬州の陸軍病院で病没。	—
O・G	長崎	三重空入隊、偵察専修学生。昭和19年9月5日沖縄で哨戒飛行中、飛行機事故のため殉職。	—
U・T	兵庫	昭和20年、中国で鉄路警備中に戦死。	—
F・S	兵庫	通信兵の見習士官となったが、戦後病死。	—
N・T	愛媛	戦病死	—
S・H	青森	戦病死	—
A・T	福岡	戦死	—
H・H	長崎	戦死	—
E・S	福岡	戦死	—

第42期生（昭和16年4月予科入学。昭和17年10月学部入学）

氏名	出身	昭和18年12月もしくは終戦時の派遣先	復員後の進路
Y・J	慶尚南道密陽郡	蘇州駐屯部隊に入営、見習士官として安慶駐屯の部隊に配属、陸軍少尉に任官、現地除隊。	ソウル特別市に現代海運を経営。
H・J	秋田	フィリピンで戦死。	—
T・M	愛知	フィリピンで戦死。	—
H・M	山口	フィリピンで転戦し、2階級特進しながら敗戦により割腹したと伝えられる。	—
T・M	不明	廬州の初年兵教育、南京金陵部隊の幹候生教育を終えながら、熱を冒しての無理な訓練に倒れた。	—

第43期生（昭和17年4月予科入学。昭和18年10月学部入学）

氏名	出身	昭和18年12月もしくは終戦時の派遣先	復員後の進路
H・S	秋田	三重の海軍航空隊に入隊。青島方面で戦死。	—
Y・H	京都	海軍飛行科予備学生を志願、元山基地で零式戦闘機の操縦桿をにぎる。昭和20年3月沖縄戦開始とともに鹿児島県串良基地に移動、4月12日に吉尾少尉機は7生隊特攻隊として出撃、沖縄本島周辺の敵艦に突入、戦死をとげる。	—
K・K	奈良	海軍飛行科予備学生を志願、急降下爆撃専修操縦学生。昭和20年1月佐伯基地に配属。5月13日米軍機空襲の際、投下爆弾で殉職。海軍中尉。	—
H・T	鹿児島	海軍飛行科予備学生を志願、鹿児島基地で訓練を受け、昭和19年9月少尉任官後、マニラ派遣。10月米軍の上陸により陸戦隊に編入され、小隊長として奮戦。マラリアに冒され、終戦後モンテルンパ米陸軍病院に収容されたが、再び立つことができなかった。	—
T・H	長野	海軍飛行科予備学生として鹿児島航空隊に入隊。卒業後ルソン島基地に転進、昭和19年10月米軍上陸とともに、陸戦隊小隊長となり、ツゲラ基地に移動し米軍と戦う。マラリアに悩まされながら終始奮戦を続けたが、ついに病に倒れ戦没。海軍中尉。	—
A・E	群馬	昭和20年1月高崎歩兵連隊入営、終戦。	昭和27年頃まで結核との闘病生活、その間父の経営する自転車卸売業を継承。
A・T	神奈川	昭和19年12月3062部隊に入隊、金陵部隊を経て21年4月帰国。	慶応大学経済学部卒。
H・S	岡山	華中を転戦。	東京大学経済学部卒。
I・T	大分	学徒応召で桂林作戦に参加。	愛知大学卒。東京の4、5の会社を経て、名古屋勤務となる。
K・K	岡山	久留米予備士官学校入隊。	戦後京都大学経済学部卒業。兼松入社。
M・K	熊本	中支派遣鵄部隊に入隊。昭和20年6月、内地沿岸防衛のため横須賀に到着したその日に終戦。	熊本鉄道管理局勤務。
M・K	広島	南京入営、昭和19年上海の第13軍司令部に転属、同地にて終戦。	昭和24年3月京都大学卒。
O・T	和歌山	南京現地入隊、昭和20年8月少尉任官。	昭和21年3月復員後、伴野物産に就職。
O・K	熊本	廬州南京の思い出はみじめ、散りし戦友への追惜やまず。	帰国、早稲田、新日鉄。
O・K	岐阜	学徒動員により入隊し、陸軍主計少尉。	戦後神戸経済大学に転入学。
O・H	奈良	和歌山連隊に入隊直後終戦。	昭和21年京都大学に転入学。
S・T	東京	終戦時大本営。	東京商大を出て三井物産入社。
S・Y	神奈川	昭和21年3月華北から復員。	東北大学に転入学。
O・A	神奈川	上海特務機関で終戦。	戦後印刷業、人形製造業を経営。
T・Y	長崎	廬州へ入隊。	戦後九州大学卒。
Y・M	福岡	福岡連隊に入営、壱岐で終戦。	戦後愛知大学卒。
Y・M	長崎	大村連隊に入隊、広東省江門で終戦。	長崎県水産業界に就職。
Y・M	鹿児島	石家荘に入隊	愛知大学に入学。
Y・S	岐阜	廬州にて兵隊生活。	京都大学に入学。
N・Y	長野	上海で終戦。	昭和21年東京商大に転入。

K・K	上海	久留米予備士官学校へ。	戦後佐世保検疫所へ。
Y・T	鹿児島	山西省へ初年兵として入隊。	戦後税務署に勤務。
M・T	香川	陸軍船舶幹候生となる。	戦後東京大学卒。
M・M	岡山	海軍航空隊大分航戦司令部で終戦。	一橋大学卒。
S・S	山梨	第8飛行師団操縦見習士官、台湾で終戦。	日本火災海上入社。
S・T	福島	特甲幹1期生として久留米に入隊。陸軍少尉。	戦後東邦銀行に入行。
M・S	鹿児島	南京に入営するも病気送還、奄美大島の名瀬に帰る。	沖縄地区分離のため内地に戻れず、昭和26年4月愛大3年に編入、昭和27年3月卒業。
S・S	高知	大阪府下の高射機関砲隊で終戦。	呉羽分校から一橋大学に転入。
H・M	千葉	海軍若松防衛隊勤務中終戦。	一橋大学卒。
D・T	東京	上海鵄部隊で終戦、翌年3月帰還。	東亜薬業に勤務。
K・S	山口	蘇州で現地除隊。	神戸経済大学に入学。
T・T	京都	南京金陵部隊で終戦。	京都大学経済学部入学。
A・T	富山	鹿児島県志布志で終戦、陸軍少尉。	東京大学経済学部に入学。
I・H	滋賀	海軍予備学生、大竹の潜水学校在学中終戦。	京都大学経済学部に入学。
T・T	香川	南昌郊外で終戦、上海で一時国府軍憲兵隊通訳となり昭和21年2月帰国。	京都大学法学部入学。
I・T	神奈川	満洲で終戦。	引き揚げ後慶応義塾大学経済学部入学。
E・K	佐賀	対馬の豊砲台観測所で終戦。	進学を諦め国鉄に就職。
I・S	大阪	安徽省宣城県で終戦、集中営を脱走して徐家滙に戻る。	引き揚げ後神戸経済大学へ編入学。
N・Y	佐賀	陸軍軍曹、蒙古の青龍峡より帰還。	呉羽分校を経て愛知大学へ編入学。
I・H	福岡	南京で終戦。	昭和21年3月引き揚げて九州大学に入学。
N・T	福岡	南京碇泊場司令部で終戦。	鹿児島に引き揚げて愛知大学入学。
H・Y	大阪	北鮮で重爆機の特攻訓練中に終戦。	翌年1月京都大学経済学部に入学。
N・A	神奈川	上海呉淞に松地区で終戦。	引き揚げ後三起工業に入社。
O・M	愛知	南支派遣軍でバイアス湾防衛中に終戦。	京都大学経済学部入学。
H・H	三重	福井県小浜で見習士官の時終戦。	京都大学経済学部入学、兼松に入社。
H・T	千葉	久留米の部隊で見習士官の時終戦。	東京大学経済学部を卒業。
H・N	山口	湖北省当陽の野戦病院で病臥中終戦。	引き揚げ後朝日新聞に入社。
M・T	北海道	熊本第5師団に出張中終戦。	陸軍少尉。京都大学経済学部を卒業して大学院に進学。
S・M	宮崎	上海近郊の真茹で終戦。	引き揚げて東京大学法学部を卒業。
F・T	鹿児島	富山県で海軍軍需監督官時代に終戦。	東京商科大学を卒業して東海電極製造に入社。
I・T	愛知	神奈川県秦野の山中で終戦。	東京商科大学を卒業して三井化学工業に入社。
Y・T	広島	茨城県百里原海軍航空隊で終戦。	京都大学法学部を卒業して三菱重工業入社。
M・A	福岡	台湾高雄の要塞重砲兵連隊で終戦。	帰還後、慶応大学を卒業して三井鉱山に入社。
H・S	神奈川	歩兵第157連隊所属、上海地区駐留中終戦。	慶大経済卒。日興物産入社。
T・S	香川	館山海軍航空隊で終戦。	25年警察予備隊入隊。
I・T	京都	宇都宮陸軍病院入院中終戦。	京都大学経済学部卒。
Y・I	熊本	上海で終戦。除隊。	愛知大学に転入。
Y・K	岡山	保定幹部候補生隊で終戦。	神戸経済大学に転入。

3. 派遣先の傾向

41 期生は、そのほとんどが中国各地に派遣されるケースが多かった。42 期生については戦病死した学生の記述のみで、それ以外の派遣先に関する記載はなかった。43 期生については中国で入隊する学生は何名かみられたが、多くは日本に戻り各地の予備士官学校や海軍飛行科予備学生などに入隊するケースが多かった。

4.終戦後の就学・就業先

41 期生は日本への引き揚げ後、ほとんどの学生が就職したことがわかる。ここでは引き揚げ後に書院生がまずどこへ就学・就業したかに着目したため、表では取り上げていないが中には転職を繰り返す書院生もいた。42 期生は前述したが派遣先がわからなかったためここではふれない。43 期生は多くが国内の大学へ転入学していた。これは出陣時に就学年数が繰り上げられたことから復学する必要があったためと考えられる。

5. おわりに

以上、東亜同文書院生の学徒出陣の派遣先について、文献をもとにまとめた。ここから、第 41 期生はそのまま中国で従軍する学生が多いのに対し、43 期生は出陣時の就学年数が短縮され、各地の予備士官学校や海軍飛行科に入隊し訓練を受ける学生が多いことがわかった。そのほか、42 期生の回想録には学徒出陣に関する記述がほとんど書かれていなかったことに関しては今後検討したい。また、出征派遣先の決定方法については、さらに調査が必要である。そのほか、終戦後の進路として、41 期生は帰国後就職する学生が多いのに対し、43 期生は国内の他大学に転入学する学生が多いことが分かった。これはまだ愛知大学が開学していなかったためでもある。それでもその中に愛知大学への入学者もみられるなど、この点については個別的な検討が必要である。